

## モスクワの外国人村<sup>1)</sup>

栗生沢 猛 夫

### 1

モスクワ、バウマンスカヤ通り。クレムリンから東北の方向に4キロメートルはあろうか。地下鉄アルバート・ポクローフスカヤ線のバウマンスカヤ駅で降りて少し歩くと、ボゴヤヴレンスキー総主教寺院が見えてくるが、その東側を南北に延びるのがこの道路である。それは革命家 Н. Э. バウマンからその名を得ているが、革命前はドイツ人通り Немецкая улица と呼ばれていた。かつて、と言っても16・17世紀のことであるが、この付近にドイツ人村 Немецкая слобода が存在していたからである。当時モスクワの市街地は現在のサドヴォエ<sup>コリフオー</sup>環状線のあたりまでしか達していなかった。この環状線は16世紀末以降、モスクワの最外辺部を囲んでいたゼムリャノイ・ヴァールとよばれる土塁が、1816～1830年に撤去された跡につくられた道路である。18世紀40年代まではここがモスクワ関税区の境界線になっていた<sup>2)</sup>。それゆえドイツ人村はモスクワ市域外に存在する独立の居留地であった。

ドイツ人村はとくに、若き日のピョートル(大帝)が足しげく通ったことで知られている。彼はここでスコットランド人の老練な軍人、パトリック・ゴードンやジュネーブ出身の冒険家で、陽気なフランツ・レフォルトと知り合い、

1) 本稿は北海道大学スラブ研究センター、昭和59年度第一回研究報告会(昭和59年7月19日)における報告に加筆・修正したものである。(『歴史における人物とその環境』(「スラブ研究センター研究報告シリーズ」№14, 1984, 3-10ページ参照)本テーマに直接・間接に関連する史料・研究文献は非常に多い。本稿はそのうちの一部に依拠した中間報告あるいは大雑把な見取り図にすぎない。

なお文中の(1), (2)…は脚注番号で、I, II…は末尾に付した地図上の外国人村の番号をさす。

2) Москва, Энциклопедия. М. 1980, стр. 270.

快活で八方破れの異教徒たちと酒宴を催した。ここで彼は西欧の技術と思想にふれ、軍人たちから戦術を学び、西方の情勢について聞かされた。またオランダ人のティンメルマンやゾンメルから幾何学、算術、砲術、航海術、築城術等を学んだのも、ドイツ人居酒屋の可憐な娘アンナ・モンスに愛を囁いたのもこの村であった<sup>3)</sup>。

ピョートルの前半生に関し詳細な伝記を著わしたアカデミー会員 M. M. ボゴスローフスキーは、若きピョートルを魅了したドイツ人村のことを次のように記している。「そこには彼の飽くことなき好奇心にとって、いかに新しく、興味深い、心ひかれるものがあったらうか！ 村においては万事が、クレムリンの宮廷や修道院の儀式とは似ても似つかなかった。そこにはもっと自由な、だがもっと洗練された慣習が支配していた。村の人々は集中的に働くことも出来たし、余暇をはるかに優雅な楽しみにささげる術も心得ていた。だがこうした『夜食』や婦人とダンスをする夜会だけがピョートルを村へひきつけたわけではない。彼は村において、もっと真面目な関心をかきたてられた。西欧の一隅としての村では、様々な国籍をもつ住民たちの議論や会話のうちに、当時西欧で展開していた大事件——方ではルイ14世と、他方ではオランダとイギリス（その玉座にオランダ統領ウィリアムが就いたばかりであった）との間に行われている、かの執拗な戦い——が反映せざるをえなかったのである。<sup>4)</sup>」

このようにドイツ人村はピョートルにとって、さながら「モスクワの東辺に身を落ちつけた西欧の一隅<sup>5)</sup>」であり、「文化砂漠のなかのヨーロッパの小オアシス<sup>6)</sup>」であった。それは古都「ウラジーミルがモスクワへの第一歩であっ

3) ピョートルと西欧、とくにモスクワのドイツ人村との関係について触れた文献は多い。ここではさしあたり、E. F. Sommer, "Der Junge Zar Peter in der Moskauer Deutschen Sloboda", *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas*. (以下JbGOと略記) NF. Bd. V, 1957, SS. 67-105 を参照のこと。

4) M. M. Богословский, Петр I. Материалы для биографии. под ред. В. И. Лебедева, ОГИЗ, 1940, т. 1 (= Slavistic Printings and Reprintings, 20 5/1, Mouton 1969), стр. 116.

5) В. О. Крютчевский 『ロシア史講話』(八重樫喬任訳) 3 (恒文社, 1982年) 314 ページ。

6) П. Н. Милоков, *Очерки по истории русской культуры*, т. III, вып. 1 (2-ое

たと同様に、ベテルブルクへの第一歩<sup>7)</sup>」を意味していた。彼はこのようなドイツ人村の住民との交際の中で、その近代化＝欧化路線に目ざめていった。まさに彼は「モスクワからドイツ人村へ、ドイツ人村から西ヨーロッパへと巣立った<sup>8)</sup>」のである。では若きピョートルに夢と刺激を与えたこのモスクワの外国人村は、それ自体どのような歴史をたどってきたのだろうか。ピョートル以前のロシアにおける外国人の活動と彼らのロシア文化への影響はどのようなものであったのだろうか。そもそも古ルーシ社会はヨーロッパから切り離された閉鎖的な社会であったのだろうか。以下にはこのような問題を、モスクワにおける外国人村に焦点を合わせながら考えてみたい。なお本稿で外国人というのは、問題の性質上、もっぱら西欧を中心とするヨーロッパ諸国民のことをさす。

## 2

ドイツ人村は後述のように、すでにイヴァン雷帝の治世から存在した。だがロシアにおけるヨーロッパ人の存在と活動について考えるとき、実は時代をもっと遡る必要がある。個々の事例は除いて、確実な、またある程度まとまった歴史的现象としてのヨーロッパ人の活動にわれわれが出会うのは、15世紀後半のイヴァン三世治世のことである。その意味で、С. Ф. Платоновがその著書『モスクワと西欧』（1926年）<sup>9)</sup>で、また新しくは、E. Амбургерがその『ロシアの経済部門における外国人専門家の募集、15～19世紀』（1968年）<sup>10)</sup>で、共に15世紀後半から叙述を始めているのは妥当である。本稿でも、以下にまず15・16世紀におけるヨーロッパ人の活動について見ることにする。

---

изд.) СПб. 1903, стр. 104.

7) С. М. Соловьев, История России с древнейших времен, кн. VII, М. 1962, стр. 173.

8) Там же, стр. 469.

9) С. Ф. Платонов, Москва и Запад, Берлин 1926 (= Europe Printing, The Hague 1964), これが同著者の Москва и Запад в XVI-XVII вв. Л. 1925.と同じ著書かどうか筆者は確かめられなかった。

10) E. Amburger, Die Anwerbung ausländischer Fachkräfte für die Wirtschaft Rußlands vom 15. bis ins 19. Jahrhundert. Wiesbaden 1968

イヴァン三世の宮廷にはギリシア人やイタリア人などの外国人が多数仕えていた。たとえば、イヴァン三世とビザンツ最後の皇帝の姪ゾエ（ソフィア）との婚姻に際し、ローマ教皇庁が重要な役割を果たしたことは広く知られているが<sup>11)</sup>、モスクワ側の交渉団のなかに、イヴァン・フリャージン（ジャン-バティスタ・デラ・ヴォルペ）、その甥のニコロ・ジスラルディ、ヴォルペの別の親戚アントニオ・ジスラルディ（アントン・フリャージン）とカルロ・ヴォルペ、さらにギリシア人ユーリー（ゲオルギオス・ペルカンコーテースカ）などが入っていた<sup>12)</sup>。1472年、ゾエはイヴァン・フリャージンに案内されてモスクワ入りしたが、そのとき多数のギリシア人やイタリア人の随員を伴っていたことは言うまでもない。

この時期とくに活発だったのはイタリアとの関係であった。ロシア側は15世紀後半だけで11回の使節団をイタリア各地に派遣したと言われている<sup>13)</sup>。なかでも技術者の募集を目的とする使節団が多かった。いくつかの例をあげよう。

1474年、上記アントン・フリャージンはロシア人セミョーン・トルブージンとともにイタリアに赴き、モスクワ・クレムリン内の崩れ落ちたばかりのウスペンスキー寺院再建のための建築家を募集しているが——アムブルガーはこれを近代ロシアにおける「最初の真の募集旅行」とよんでいる<sup>14)</sup>——、このときに応募してモスクワにやってきたのが、ヴォローニャ出身の有名なアリストー

11) 拙稿、「モスクワ第三ローマ理念考」、金子幸彦編『ロシアの思想と文学』、恒文社1977年、42-43ページ、また中村喜和、「ゾエの結婚—ロシアにおける『ビザンツの遺産』にふれて」、『一橋論叢』84巻6号（1980年）を参照のこと。

12) 以下の叙述は特に断わらない限りは上記 Amburger の著書第一章によっている。なお「フリャージン」とは当時のロシアでイタリア人ないし一般に南および南東ヨーロッパ人をさす語である。

13) В. И. Рутенберг, “Итальянские источники о связях России и Италии в XV в.”, в кн.: Исследования по отечественному источниковедению, М.-Л., 1964, стр. 462 15世紀のロシア・イタリア関係については、さらに И. С. Шаркова, “Заметки о русско-итальянских отношениях XV-первой трети XVI в.”, в: Средние века, вып. 34, М. 1971, стр. 201-212; 松木栄三, 「ロシア=地中海関係史の一側面—15世紀のロシアとイタリア人—」, 『地中海地域における集落形成の諸問題』(一橋大学地中海研究会, 1980年) 43—54頁を参照

14) Amburger, Anwerbung, S. 14.

テレ・フィオラヴァンティ（ロドルフォ・フィオラヴァンティ・デリ・アルベルティ）であった。彼は息子のアントニオと弟子のピエトロを伴ってモスクワに現れ、1475—1479年にはウスペンスキー寺院を現在の形に再建し、さらに大砲、鐘、貨幣等の鑄造に従事した。彼はまた1478年に、モスクワ軍がノヴゴロドに進軍したときに、ノヴゴロド市内を貫流するヴォルホフ川に船橋をかけただけでなく、トヴェーリに進軍したモスクワ砲兵隊の技術顧問としても活躍した。

また1486年にはギリシア人ペルカンコーテースが、1488年にはデメトリオス・ラーレフとマヌエル・ラーレフ兄弟がイタリアに派遣された。その結果、ミラノの建築家マルコ・ルッフォとピエトロ・アントニオ・ソラーリ、リューベック出身の医師で天文学者のニコラウス・ブーロウ、ローマの銀細工師クリストフォロと二人の弟子、ユダヤ人医師レオなどがモスクワにやってきた。このうちブーロウはノヴゴロド大主教ゲンナージーの願いで暦学専門家として働き、後にはモスクワで宮廷医師となった。ソラーリとルッフォはともにクレムリンの城壁・城門の建築にあたりとともに、クレムリン内のルネッサンス風グラノヴィータヤ宮殿を建設した。

1499年にはデメトリオス・ラーレフがロシア人ミトロファン・カラチャーロフとともにイタリアにむかい、多数の職人を雇い入れた。職人の家族も加えて一大キャラバンとなった一行は、モスクワへの途上モルダヴィアで、モスクワに敵意をもつステファン公によって抑留され、解放後今度はクリミアでメングリ・ギレイ汗によって捕えられ、1504年の11月になってやっとモスクワに到着した。一隊のなかには、クレムリンのアルハンゲリスキー寺院やモスクワ市内のいくつかの大寺院を建立したフロイジオ・ヌオーヴォがいたし（彼はクリミア抑留中にも汗のためにバフチ・サライ建築工事に従事していた）、クレムリンの大鐘楼“イヴァン・ヴェリーキー”を建築したボン・フリャージン、プスコフの城壁を補修したイヴァン・フリャージン（上記の同名人物とは別人）なども加わっていた。

彼らは多くの場合多額の報酬を得たが、その境遇は必ずしも恵まれたものとは限らなかった。たとえば、医師レオは1490年の初めにモスクワに到来し、同

年の4月22日には首を刎ねられている。彼が大公の息子イヴァン・マラドイの病いを癒すことに失敗したからである。またフィオラヴァンティは後に帰国を願ひ出たが、かえってそのために財産を没収され、投獄されてしまった。大公の下での勤務は必ずしも安全ではなかった、ということになるが、事情は彼らの本国においてもそう変らぬものであったことを忘れるべきではあるまい。

以上は主としてモスクワ国家によるイタリアにおける募集の例である。同様の募集は言うまでもなく、他国でも行われた。とくにドイツ各地における募集の例が知られている。たとえば、前述のゾエとともにモスクワ入りしたギリシア人ゲオルギオス・トラハニオーテースは、その後何度かの募集旅行をドイツ諸地方で行っている。ヴァシーリー三世治世の1513年には、神聖ローマ皇帝マクシミリアン一世が、ザクセン人クリストファ・シュライニッツを代理人とするモスクワからの要請に応じて、一団の歩兵、火器・攻城具製造職人また土木専門家をリュウベック経由で送り出している<sup>15)</sup>。マクシミリアンの使者フォン・ヘルベルシュタインが最初のモスクワ訪問を終えて帰国した際（1517年）にも、ロシア人のプレミヤニコフとイストマ・マールィが随伴し、5人の大砲製造職人を雇い込んでいる。

イヴァン四世政府も外国職人の招聘に熱心であった。なかでも若きツァーリの意をうけたハンス・シュリッテの募集活動は興味深い。ゴスラーの商人シュリッテは、穀物買付のためにノヴゴロドにやってきたが、都市代官交代のとばかりで商品を受け取ることができず、苦境を打開するために1546年、モスクワにやってきた。翌年彼はツァーリの要請をうけて、アウグスブルグに皇帝カール五世を訪れ、モスクワのツァーリのために、「ドクトールとあらゆる種類の技能の親方衆」の募集許可を得た。このとき彼はツァーリの全権大使であるかのように振舞い、正教とカトリックの合同を提案して皇帝の歓心を買ったのだが、大砲製造職人や軍人までも募集するつもりであることは打明けなかった。

15) Siehe, E. F. Sommer, "Die Anfänge der Moskauer Deutschen Sloboda" Deutsches Archiv für Landes- und Volksforschung. Bd. V, 1941, S. 423.

こうして彼は、外科医、薬剤師、建築家、大工、築城職人、武器工、鉦山師、時計職人、紙職人、金細工師、法律家、行政専門家等123人を雇い入れた。そして一説では、同時に800人のドイツ人傭兵をも募集したという。だが彼の計画は最後の段階で失敗した。対ロシア貿易における独占が破れることを恐れたリューベック市当局が、モスクワの強国化に不安を覚えたレヴァル（現タリン）市当局やリガ大主教ヴィルヘルムら各方面からの警告や要請をうけて、シュリッテ一行の出港を拒み、彼を拘禁したからである。シュリッテのような例は他にも知られているが（たとえばバイエルンの商人ヴェイト・セングの例）、それは、モスクワにおいて西欧の技術者の招聘を商売の一環として請け負うことがすでに可能となっていたことを示している<sup>16)</sup>。

## 3

モスクワに現われた外国人は当初クレムリン内に居住していた。だがやがて数が増えるにつれて、市内のあちこちにある程度まとまって住みつくようになる。外国人村はその延長線上に成立する<sup>17)</sup>。

- 16) E. Donnert, Rußland an der Schwelle der Neuzeit, Der Moskauer Staat im 16. Jahrhundert, Berlin, 1972, SS. 316-320.
- 17) なお以下にモスクワにおけるドイツ人村、その他の外国人村を直接に扱った文献をあげておく。С. К. Богоявленский, “Московская Немецкая слобода”, в: Известия АН СССР. Серия история и философия. 1947, т. 4, № 3, стр. 220-232; Е. А. Звягинцев, “Слободы иностранцев в Москве XVII века” в: Исторический журнал, № 2-3 (1944), стр. 81-86; В. В. Нечаева, “Иноземские слободы в Москве”, в сб.: Москва в ее прошлом и настоящем, т. II, ч. 2, М. 1910, стр. 18-43; В. Снегирев, Московские слободы, М. 1956 (とくに第6章)。さらに注15にあげた Sommer, “Anfänge…” はスムータ期までの外国人村（とくにドイツ人村）について詳しく扱っている。なお最近アメリカで出た博士論文 M. Lahana, Novaja Nemeckaja Slovoda — Seventeenth Century Moscow's Foreign Suburb, North Carolina University, 1983 は残念ながら参照できなかった。

また16・17世紀ロシアにおける外国人の地位ないしそのおかれた状況についてはさしあたり以下を参照されたい。А. Лаппо-Данилевский, “Иноземцы в России в царствование Михаила Федоровича”, в: Журнал Министерства Народного Просвещения (以下 ЖМНП と略記), 1885-X, стр. 66-106; А. Пыпин, “Иноземцы в Московской России” в: Вестник Европы, 1888-1,

モスクワ最初の外国人村は、おそらく16世紀初頭に形成された。ヘルベルシュタインによれば、ヴァシーリー三世は、リトワ人その他の外国人からなる約1500人の歩兵部隊を抱えていたが、彼らはザモスクヴォレーチエ地区にまともに住んでいた。タートル人の襲撃路にあたる、モスクワ川のいわゆる「クリミア浅瀬」の付近である。この聚落は「ナリ」（そこから「ナレイキ」ないし「ナリフキ」と呼ばれたが<sup>1)</sup>、それは住民の間に頻繁に言い交わされていた、「一杯ついでくれ！」налей！から来ていたという。住民に自由な飲酒（蜂蜜酒やビールなど）が認められていたことと関連があった。<sup>18)</sup>（ロシア人には祝日等にしか認められていなかった。）ナリフキは16世紀後半には消滅した。その理由については諸説がある。1571年のクリミア汗デヴレト・ギレイ軍の襲撃の際に破壊されたとするもの、またモスクワ住民の軽蔑の目差や彼らとの様々な不快事に耐えきれずに別の場所へ移転したとするものなどがある。だが外国人傭兵のロシア女性との通婚によるロシア化、16世紀中葉に創設されたストレリツィ部隊の居住区への吸収、さらにドイツ人村の成立とそこへの移住について説く П. Н. Милукоフの説が妥当のように思われる<sup>19)</sup>。

ドイツ人村はイヴァン雷帝期に成立した<sup>20)</sup>。雷帝はリヴォニア戦争中に捕虜としたリヴォニア・ドイツ人の多くをモスクワに護送させ、ヤウザ川右岸に住まわせた<sup>2)</sup>。厳密な成立年代は不明である。村はヤウザ川とコクイ川（チュチョーラ川支流）の間に位置していたので、長い間コクイないしくイとも呼ばれ

стр. 255-296; А. Мулюкин, "О свободе преезда иностранцев в Московское государство", в: ЖМНП, 1908-V, стр. 57-81; M. Woltner, "Zur Frage der Untertanenschaft von Westeuropäern in Russland bis zur Zeit Peter des Grossen einschliesslich" in: JbfGO, Bd. III. 1938, SS. 47-60; M. Szeftel, "The legal condition of the foreign merchants in Muscovy", in his: Russian Institutions and Culture up to Peter the Great, London 1975, pp. 335-358.

18) ヘルベルシュタインの『モスクワ事情』については、とりあえず次のものを利用する。Sigismund zu Herberstein, Reise zu den Moskowitern 1526, Hrsg. u. eingeleitet von T. Seifert, München 1966, SS. 142, 167-168. また Sommer "Anfänge...", SS. 423-425 をも参照。

19) Милуков, Указ. соч. стр. 104.

20) Sommer, "Anfänge..." S. 430 f. が詳しい。



ていたが、これは蔑称であった<sup>21)</sup>。この村の住民も生計の維持のために酒類の醸造権・販売権を認められていた。もちろん手工業に従事する者もいたし、なかにはヤウザ川を堰止めて水車小屋を建て、製粉業を営む者もいた。村の規模は、ある同時代人の伝えるところによれば、約150戸であった<sup>22)</sup>。村にはナルヴァ通りやデルプト通りのように住民の出身地を示す道路があった<sup>23)</sup>。だが村は十分に「西歐的」な居住区には発展しなかった。建物はすべて粗末なモスクワ風の茅屋であった。イヴァンは明らかに住民らを軍人として、また技術者、商人として利用しようと考えて、彼らを優遇した。だが彼らは高慢で、生活は奢侈に流れ、モスクワ市民の反感をかうばかりで、まったく役に立たなかった。業をにやしたイヴァンは村内のルター派教会（кирка）<sup>24)</sup>を破壊し、家々を略奪し、住民を厳寒の中、裸で追い出すように命じたという。1578年ないし1580年の冬のことである<sup>25)</sup>。

ドイツ村はその後間もなく再建されたようにみえる。ボリス・ゴドゥノフ帝は外国文化崇拜者として知られているが<sup>26)</sup>、彼の治世に皇女クセーニヤの花嫁としてモスクワ入りしたデンマーク王子ヨハンセンの同行者の一人は、「モス

21) 川の名に由来するコクイが蔑称となった経過についてはオレアリウスがよく伝えている。See, *The Travels of Olearius in Seventeenth-Century Russia*, Translated and edited by S. H. Baron, Stanford Univ. Press, 1967. p. 280. さらに同ページの、訳者S. H. Baronによるコメントをも参照のこと。

22) Богоявленский, “Немецкая слобода”, стр. 220 リヴォニア戦争中にロシア側に捕えられたリヴォニア人の数は、1564年だけで3000人はいたとされている。ゾンマーは総数で10,000人は下らないと考えている。Д. Цветаев, *Протестанство и протестанты в России до эпохи преобразований*, ч. I, в: *Чтения в Императорском Обществе Истории и Древностей Российских при Московском Университете* (以下 ЧОИДР と略記) 1889, кн. 4, стр. 38; Sommer, “Anfänge…” SS. 426-427; Платонов, *Москва и Запад*, стр. 21.

23) Цветаев, *Протестанство и протестанты*, ч. I, стр. 241

24) 1575年末か1576年初に建てられたモスクワで最初のルター派教会である。建立をめぐる状況については、Д. Цветаев, “Положение протестантов в России до Петра Великого” (I), в: *ЖМНП*, 1883-IX, стр. 72-74; его же, *Протестанство и протестанты*. ч. I, стр. 42-46.

25) Sommer, “Anfänge…” SS. 433-436 に詳しい。

26) Платонов, *Москва и Запад*. стр. 40 によれば、彼は史料的に確認されているだけで9人（リューベックへ5人、イギリスへ4人）、一説には18人（英独仏へ各6

クワの町から南東（北東か一粟生沢）の方向ほとんど四分の一マイルのところ  
に、住民が「すべてドイツ人」からなる村があり、村内に教会を建て、「ドイ  
ツ人の信仰に従って生活することを」許されていた、と伝えている<sup>27)</sup>。ついで  
のことだが上記ヨハンセンはモスクワ入りして間もなく病死し（反ボリス派に  
よる毒殺の噂もあった）、その遺体はドイツ人村の墓地に埋葬された。ボリス  
は王子の発病を悲しみ、回復の暁には捕虜全員の釈放を約したという<sup>28)</sup>。

ところでリヴォニア戦争との関連でもう一つの外国人村が成立した。リヴォ  
ニア軍のスコットランド人傭兵が、捕虜となって、ヤウザ河口に近いボルヴァ  
ノフカ地区に集められた。今日のタガンスカヤ広場付近である<sup>29)</sup>。もっともこ  
のスコットランド人聚落は長続きしなかったようで、彼らの多くはロシア軍の  
一部として出征したり、国境地帯での守備隊勤務についたり、村に定住する  
ことが少なかったと言われている<sup>29)</sup>。フョードル帝治世にもスコットランド人  
兵士のいたことが確認されているが、彼らの居住地については知られていない。  
いずれにせよ、やがて始まる大混乱期＝スムータ時代に、かりにそれまで存続  
していたとしても、それは存在をやめたであろう。事実ドイツ人村の方は、と  
くに偽ディミートリー二世軍やポーランド・リトワ軍の侵入の最中に略奪され、  
焼き払われた。住民は四散し、一部は潜称者の軍に、他の一部はポーランド軍  
内のドイツ人部隊に紛れ込んだ。また多くの者が北方、ヴォログダやアルハン  
ゲリスクへ逃れ、そのまま国外に脱出する者もいた。廃墟と化したドイツ人村  
はその後数十年間、住む者もなく放置された。

人)の留学生を派遣した。ただし一人も帰国しなかった。さらに Amburger, An-  
werbung, SS. 22-24 を参照。

27) Два сватовства иноземных принцев к русским великим князьям в XVII  
столетии, ЧОИДР, 1867, кн. 4, стр. 21.

28) Богоявленский, "Немецкая слобода", стр. 220-221.

29) Там же, стр. 221; Цветаев, Протестантство и протестанты, ч. I, стр. 240-  
241.

## 4

動乱時代が去り、新しいツァーリ、ミハイール・ロマーノフが即位した。モスクワに平和が戻った。モスクワにはまだ反外国人感情が強く残っていた。だが国家の再建と再軍備の必要性から、政府は軍人、技術者、職人、商人等の招聘が急務であると考えた<sup>30)</sup>。西欧人が徐々に、再びモスクワの街に見られるようになった。だが彼らの住む特別の居住区はもはや存在しなかった。彼らは少しずつまとまってモスクワ市内に住みついた。

そのうちドイツ人の多くは、マロセイカ（現ボグダン・フメリニツキー通り）とポクロフカ（今日のチェルヌィシェーフスキー通り）付近に住みついた<sup>IV</sup>。ここは革命のときまでドイツ人を中心とした外国人のお気に入りの居住区であった。この地区には1638年の世帯調査によれば、57戸の外国人家屋があった（ただし軍人を除いて）という<sup>31)</sup>。ドイツ人の他にここには、オランダ人やデンマーク人も住んでいたが、とくに多かったのはイギリス人であった。この地区の一角（エウフロフカ＝現キーロフ通り）に、おそらくはスムータ以前から、<sup>アンギリス★</sup>英国<sup>ドゥヴオール</sup>会館が存在していたことが知られている。英国会館はすでに前世紀中葉から、キタイ・ゴロドのヴァルヴァルカ（現ラージン通り）の聖マクシム教会の傍に存在していたが、おそらくイギリス商人の数がふえるにつれて、エウフロフカにもつくられたものと考えられる<sup>32)</sup>。ただ注意すべきは、彼らはここで一つの閉鎖的な居住区を形成したわけではなく、ロシア人の間に混じって、比較的ま

30) 現に Цветаев, Протестантство и протестанты, ч. I, стр. 248 も記すごとく、1614年、ホルモゴールィに居たオランダ人シモン・ブースはモスクワに住むように招かれている。だが当初は外国人もまだ不安が残るという理由で後込み、デウリノ条約（1618年）後再び招聘に応ずるようになる。すでに1622年には35戸を数えていた。（Там же, стр. 249）

31) Богоявленский, “Немецкая слобода”, стр. 221; Звягинцев, “Слободы” стр. 82.

32) Е. Звягинцев. “Английский двор в Москве XVI в.” в: Исторический журнал, № 10-11 (1941), стр. 141-144. М. Шэфтелによれば、1649年までに英国会館はモスクワだけで三つになっていた。（Szeftel, “The legal condition”, p. 352）

とまって住んでいたにすぎなかったことである。

ところで1630年代から40年代にかけて数度モスクワを訪れたドイツ人アダム・オレアリウスは、モスクワにルター派とカルヴィン派の信者が千人ほど居たと伝えている<sup>33)</sup>。また上記1638年の調査はモスクワ市全体に関するものではなかったが（たとえばザモスクヴォレーチエや市の北西部については抜けている）、それでも全部で180戸の外国人世帯を数えている。C. K. ボゴヤヴレンスキーはこの数字を基に、モスクワ全体では約250戸になると推定している<sup>34)</sup>。なるほどそれは、ボゴヤヴレンスキー自身が指摘するように、当時世界で有数の大都市に成長していたモスクワでは取るに足らぬものであったが（モスクワの全世帯数の1%未満）、それでも無視しえない数になっていたといえる。

さて1638年の調査簿からは、ポクロフカの居住区のほかに、さらに二つの外国人地区が知られるという。一つはベールイ・ゴロドのプロローフスキエ（ミヤスニツキエ）門の外側、オゴロドナヤ村<sup>スロヴナダー</sup>内にあったV。この地区に住む外国人の数は不明である。だがここは一般にドイツ人村ともよばれ、「洗礼を受けていない」、つまり正教に改宗していないドイツ人が住み、ルター派の礼拝堂と司祭の家があったことが知られている<sup>35)</sup>。

他はベールイ・ゴロドのスレーチェンスキエ門の外側、ベチャートナヤ村<sup>スロヴナダー</sup>内にありVI、4軒が確認されている。<sup>36)</sup>

以上の他に知られているのは、ゼムリャノイ・ゴロドのミョールトヴィ横町<sup>ペルローク</sup>（現オストローフスキー横町）の外国人地区（数十軒）であるVII。ボゴヤヴレンスキーはこの地区をもドイツ人村と呼んでいるが、詳しいことは分っていない

33) The Travels of Olearius, p. 278: 千人か千家族(戸)かをめぐって解釈が分かれている。原文は Tausend Häupter である。クリュチャーフスキーにいたってはルター派のみで1000家族いたと記しているが (B. O. Ключевский, Сказания иностранцев о Московском государстве, Петроград 1918, стр. 232) これはもちろん極端で、ここは Цветаев, Протестантство и протестанты, стр. 250 の如く、1000人と考えるべきである。もちろんオレアリウスの伝える所が事実であるかどうかは別問題である。

34) Богоявленский, "Немецкая слобода", стр. 222.

35) Там же, стр. 221-222; Звягинцев, "Слободы", стр. 83.

36) Звягинцев, "Слободы", стр. 83.

い<sup>37)</sup>。

もう一つゴーリキー通りに出る小グニェズコーフスキー（前スウェーデン）横町に、スウェーデン商館がありⅧ、スウェーデン人が集まっていたことも知られている<sup>38)</sup>。

## 5

以上のミハイール帝治世の外国人居住区は、その後いずれも順調な発展をとげることはできなかった。それは何よりもモスクワ住民各層の反外国人感情に起因していた<sup>39)</sup>。たとえばモスクワの大商人たちは、外国人に与えられた各種の特権が彼らの商業上の利益を損うことに憤りを覚えていた<sup>40)</sup>。またポサード民たちも、税金を免除されていた外国人の同一地区への居住は、彼らの租税負担額の増大につながるという理由で反対した。外国人による土地や家屋の取得が地価の高騰を招いたことも、住民たちの不満をよび起した<sup>41)</sup>。だが誰よりも外国人に対する敵意を顕わにしたのは聖職者であった<sup>42)</sup>。彼らは外国人を異端

37) Богоявленский, “Немецкая слобода”, стр. 222.

38) Звягинцев, “Слободы”, стр. 83.

39) モスクワ住民各層の反外国人感情と新外国人村成立の事情については、とくに S. H. Baron, “The Origins of Seventeenth-Century Moscow’s Nemeckaja Sloboda”, in: California Slavic Studies, V (1970) pp. 1-17 (= Baron, Muscovite Russia, London 1980 に所収) を参照のこと。

40) モスコーヴィヤにおける外国商人の法的地位については、さしあたり、注 (17) にあげた M. Szeftel の論文を参照。17世紀のロシア商人が、様々の特権をもつ外国商人に対し、いかに苛立ち、また途方に暮れていたかは、モスクワ商人たちがツァーリに提出した1646年の嘆願状のなかの次のような言葉のうちによく現われている。「我らは外国商人たちと競争することができない。彼らは富んでおり、我らは彼らと一緒にやっていくことはできない。彼らは一致団結して動くが、我らはそうはできないし、その力もない。我らが自国の産業家を失い、零落することのないように、外国人の競争を排除し、彼らを国内の諸地方や都市から追放しなければならない。彼らは海港にのみ来させるべきである。ただ諸産業の経営は許可してもよいだろう。ロシアの貧しき民は彼らの下で生きる道を得るであろう。我らも注意してみよう。もし万事うまく行ったなら、我らも同様に行なおう。」(см. С. Соловьев, “Московские купцы в XVII веке”, в: Современник, 71-10 (1858), стр. 440.

41) Богоявленский, “Немецкая слобода”, стр. 222-224.

42) Цветаев, “Положение протестантов” (I), стр. 78-80; его же, Протестантство и протестанты, ч. 1, стр. 69сл.

とみなし、彼らとの接触を魂の救済に有害なものと考えた。ロシア人聖職者らの反外国人感情は、とくに1643年にモスクワの11人の聖職者がツァーリに提出した嘆願状によく表われている。それによると、外国人は住民から住宅や宅地を高値で購入し、ロシア人の使用人を雇い、自宅で居酒屋を開き、正教会の脇に自分たちの礼拝堂を建てるなどしたので、「これらのドイツ人からロシアの民にあらゆる種類の汚れがふりかかり」、正教教区には「人がいなくなっている」という。嘆願者たちは「ドイツ人」によってひきおこされる諸困難の除去を願い、モスクワ全域において外国人がロシア人から住宅を購入したり、担保にとったりすることを禁じ、彼らが正教会の近くに建てた礼拝堂を撤去することを政府に求めている<sup>43)</sup>。

聖職者をはじめとする住民各層からの以上の如き圧力に加えて、1648年以降燃えあがった市民の反政府運動と宗教的熱狂が、政府をしてついに、外国人とロシア人の混住状態に終止符を打たせることとなった。すでに1649年の「法令典」第19章40条は、住宅、宅地の外国人への売却を禁止しており、外国人はゼムリャノイ・ゴロド外部にのみ住宅の獲得を許されるだけになっていたが<sup>44)</sup>、1652年10月4日、政府は勅令<sup>45)</sup>により、モスクワの外国人をロシア人住民から隔離することにした。モスクワの外国人は四週間以内に彼らの家売り渡し、市外の特別区に移り住むように命令された。改宗者だけが市内に留まることが許された。

彼らに割りあてられた地は「ポクローフスキエ門を越え、ゼムリャノイ・ゴロドを越えたヤウザ川のほとり」、すなわちバスマンナヤ村<sup>スロツォグ</sup>やポクローフスコエ村<sup>コロ</sup>と接する、旧ドイツ人村が存在した場所（正確に言えば、少し北東にずれた所）であった区。それは正式には「新外国人村」 Новая Иноземская

43) Акты исторические, собранные и изданные Археографическою комиссиею, т. III, СПб. 1841, № 36, стр. 114-115.

44) М. Н. Тихомиров и П. П. Епифанов, Соборное Уложение 1649г. М. 1961, стр. 236.

45) Полное собрание законов Российской Империи, Серия I, т. I, № 85, стр. 264.

слобода とよばれたが、民衆の間では新ドイツ人村ないし単にドイツ人村とよばれ、それがやがて公式文書などでも用いられるようになった。

先の勅令が短時日のうちに転居を強制したことで外国人たちに多大の困難を強いたことは疑いない。だが政府のこの外国人隔離政策は、オレアリウスも述べるように、外国人にとって必ずしも否定的な意味をもっていたわけではない<sup>46)</sup>。彼らは以後日常的な不愉快事を免れることができたし、集団で住むことにより、ロシア化の危惧もうすれ、西欧の風習・文化も維持しやすくなったからである<sup>47)</sup>。また勅令自体、厳格に守られ、実行されたわけでもなかった。政府は勅令発布後一年半近くたった1654年にも、移住を促す策を講じている<sup>48)</sup>。また少なくとも20人の有力な外国人医師、商人が改宗していなかったにもかかわらず、市内に留まることを許されている<sup>49)</sup>。かくてアレクセイ帝治世末には、市内に住む外国人の数は非常に多くなっていたという<sup>50)</sup>。

村の規模についてみよう。1665年の調査によると、村には全部で206戸が存在した。家屋所有者の大部分（70%）は軍人で、他は手工業者25、商人22、牧師、画家、法律家各3、医師、薬剤師各2、不明3であった。家屋所有者以外の住民（つまり間借生活者）は98名いた。そのおよそ三分の二は奉公人であった<sup>51)</sup>。村が最大規模を誇ったのは1670～1680年代であったが、男女合わせて

46) オレアリウスによれば新外国人村に移ることを強制されたドイツ人らは、これは「蟹が水中に投げられることによって罰せられた」ようなものだ；と書いていたという。The Travels of Olearius, p. 281. またクリュチーフスキーは新外国人村成立の由来をもっぱら外国人側の希望によって説明している。Ключевский, Сказания, стр. 231-232.

47) たとえば、ロシア人と離れて住んだことにより、後述の如く信仰生活は保障されたし、やがては学校や劇場も村内に建てることが許された。Цветаев, Протестанство и протестанты, ч. I, стр. 222сл.; Соловьев, История России, кн. VII, стр. 135-137.

48) Нечаева, "Иноземские слободы", стр. 22.

49) Богоявленский, "Немецкая слобода", стр. 231.

50) アレクセイ帝期末にモスクワに滞在したヤーコフ・ロイテンフェルスによる。(ЧО ИДР, 1905, кн. 3, стр. 94), cf. Szeftel, "The legal condition", p. 355. note 21.

51) 以上の数字は Богоявленский, "Немецкая слобода", стр. 225 による。(см.

1500人を越えることはなかったという<sup>52)</sup>。

村には「ヨーロッパのほとんどすべての国民」が住んでいたと言われている。だがドイツ語 hochdeutsch が日常語として用いられていたこと、また住民の大多数がドイツ風の服装をしていたことから判断されるように、ドイツ人が多数を占めていたことは疑いない。これに次いで多かったのは、オランダ人、イングランド人、スコットランド人、フランス人などであった。間借生活者のなかにはポーランド人、リトワ人、タタール人、トルコ人などもいた<sup>53)</sup>。

ところでこれまで断りなしに、「ドイツ人」 немец, немчин について述べてきたが、実はこの語を簡単にドイツ人と訳すことは誤解を招く恐れがある。というのも немец とは、元来は немой に由来し、「不明瞭な話し方をする人」、つまり外国人一般をさしたからであり、この頃の史料にも「イギリス系ニエメッツ」 англійский немец, немец англійской породы とか「スウェーデン系ニエメッツ」 немец свейской земли 等々の表現がよく出てくるからである<sup>54)</sup>。それゆえこの語には、ヨーロッパ人、とくに北西ヨーロッパ人一般の意味があったと考えるべきであり、この点に十分に留意して個々のケースを見ていく必要がある。

新ドイツ人村への移住にあたって、各戸主には一定の土地が分与された。分

История Москвы в шести томах, т. I, М. 1952, стр. 488) 他の多くの研究者は同じ1665年時点で204戸であったとする。たとえば Цветаев, Протестантство и протестанты, ч. I, стр. 256 は、軍人142, 職人24, 医師2, 薬剤師2, 翻訳者3, 商人23, 代言人1, 牧師3, 「外国人」(?) 2, ユダヤ人1, 不明1の計204戸としている。さらに Нечаева, “Иноземскія слободы” стр. 24; Милоков, Очерки, т. III, вып. 1, стр. 107; Звягинцев, “Слободы”, стр. 83 もこれに従っている。

52) Милоков, Очерки, т. III, вып. 1, стр. 107; Sommer, “Der junge Zar” S. 70

53) Цветаев, “Положение протестантов” (II), стр. 67-68; Богоявленский, “Немецкая слобода”, стр. 225; Ключевский, Сказания, стр. 233.

54) М. Фасмер, Этимологический словарь русского языка, т. III, М. 1971, стр. 62; И. И. Срезневский, Материалы для словаря древне-русского языка, т. II, СПб. 1902 (Graz. 1955) стр. 486-487; Тихомиров/Епифанов, Уложение, стр. 374; Звягинцев, “Слободы”, стр. 81; Снегирев, Московские слободы, стр. 201. 時代がさらに遡ると、ローマ出身のニエムツィ немцы “от римлян” やイタリア系ニエムツィ фрязовы-немцы というのも出てくる。



与地の広さは、各人のモスクワ国家に対する功績や勤務上の地位に応じて決定された。たとえば、将官と佐官級は800平方サージェン（約3600平方メートル）、尉官級で450、准士官—150、下士官—80である。軍人以外では医師が第一カテゴリー、薬剤師、金銀細工師、金銀モールド職人等は第二カテゴリーに入り、商人、手工業者、寡婦は以前市内に持っていたのと同じ広さの土地を与えられた。以前市内に自己の家屋をもっていなかった者は48平方サージェンしか与えられなかった。家屋は、希望する場合には、旧所在地から国庫の費用で移送された<sup>55)</sup>。

住民の多くは、軍人をはじめとして国家に勤務していたが、給与面で最も優遇されたのは医師、薬剤師、高級将校であった。医師の場合、年間100～300ルーブリの俸給に、それを上回る生活給が支給され、合計で1000ルーブリを越える場合もあった。また軍人は、少佐の場合は月13ルーブリであったが、騎兵大佐は40ルーブリであった。プリカーズで各種文書の翻訳に従事する翻訳官は年50～100ルーブリ、技術者・職人の場合は年60ルーブリまでの様々な段階があったようである<sup>56)</sup>。

新ドイツ人村の住民には様々な特権が与えられていたが、法的にも彼らはロシア人とは若干の点で区別されていた。確かに外国人もロシアの司法と行政の支配に服したが<sup>57)</sup>、たとえばロシア人士官が ラズリャードヌイェプリカーズ 官位庁、司法庁、封地庁等

см. В. Е. Сыроечковский, Гости-Сурожане, М.-Л. 1935, стр. 15.

55) ПСЗР, т. I, № 85, стр. 264; Звягинцев, “Слободы”, стр. 83-84.

56) Цветаев, Протестанство и протестанты, ч. I, стр. 272-273; Нечаева, “Иноземскія слободы”, стр. 25; J. T. Fuhrmann, The Origins of Capitalism in Russia: Industry and Progress in the Sixteenth and Seventeenth Centuries, Chicago, 1972, pp. 221-223. 以上は必ずしもドイツ人村の住民に限定してのことではなくモスコヴィヤにおける外国人一般の政府による待遇と解すべきである。(この点についてより一般的には、Лаппо-Данилевский, “Иноземцы”, стр. 88-98 を参照)

ルーブリの価値について一言しておく、クリュチェーフスキーは17世紀後半の1ルーブリを200年後の17ルーブリに相当するものと考えている。(В. О. Ключевский, “Русский рубль XVI-XVIII вв. в его отношении к нынешнему” в его: Сочинения, т. VII, М. 1959, стр. 227)

57) この点でドイツ人村は、ハンザ商人の「ドイツ会館」に一種の治外法権を認めてい

様々の官庁の支配に悩まされたのに対し、外国人士官（や国家勤務者）の場合イノゼームスキー・プリカーズは、外国庁の管轄下におかれ、原則的には他の官庁の支配を受けることはなかった<sup>58)</sup>。

村内部の生活において、住民に自治が認められていたかどうかは疑わしい。B. JI. スネギリョフは、村内秩序の維持、酒・タバコの密売防止、ロシア人逃亡者の流入阻止等を任務とする「彼ら自身の十人長」が存在したことを根拠に、村人の生活は「全く自立的」であったと述べているが<sup>59)</sup>、この十人長が外国庁によって任命される役人的な存在であったことには触れていない<sup>60)</sup>。より重大なのは、ドイツ人村には、おそらくは外国庁と外務庁ボソリスキー・プリカーズの双方に責任をもつ治安責任者たる士族が派遣されていたことである。少なくとも1658年にはこのような士族の存在が確認されている。彼は村内で外国人同士、あるいは外国人とロシア人が争わぬよう監視し、紛争や殺人事件が起った場合には、軍人や国家勤務者は外国庁に、商人の場合は外務庁に、ロシア人の場合は然るべき官庁に送検するよう指示されていた<sup>61)</sup>。酒、タバコ等の密売防止上の責任も彼にあり、彼はこのような職務を、おそらくは上記の十人長やストレリツィなどを助手として行っていた。

以上はドイツ人村がモスクワ政府によって手厚く保護されていたことを物語るものであると同時に、彼らの村内部での生活が隅々にいたるまでモスクワ的原理によって律せられていたことをも示している<sup>62)</sup>。なおモスクワの他の外国

たノヴゴロド方式とはちがって、モスクワの原則に従っていた。Цветаев, Протестанство и протестанты, ч. I, стр. 274.

58) 外国からの到来者（使節、新来者）や商人の場合は、外務庁の管轄である。ただし新外国人村には軍人が多かったため、全体としては外国庁が主たる責任官庁となっていた。だがそれに対し不満をもつ村の商人らの要請もあり、1666年からは官位庁が代って監督にあたることとなった。Там же, стр. 274сл.

59) Снегирев, Московские слободы, стр. 214.

60) С. К. Богоявленский, “Московская мещанская слобода в XVII в”, в его: Научное наследие о Москве, М. 1980, стр. 104.

61) Там же, стр. 62-63.

62) ただしモスクワ政府やロシア正教会当局がドイツ人村内部の紛争などについて、必ずしも解決に積極的でなかった、という事情は指摘しておかなければならない。だがこれは、当時のモスクワ国家の行政能力の問題であって、これを理由に村の自治

人村の一つ、メシチャンスカヤ村<sup>スロヴナダー</sup>については、村の長老が存在し、村会も機能していたことが知られているが<sup>63)</sup>、ドイツ人村については、この点は史料がない。

住民が得ていた特権のなかで特に重要なのは宗教的自由であった。モスクワ政府は宗教的寛容を政策として意識的に実行したことはなかった。だが多くの外国人をひきつけるために、政府は彼らが村内において自己の信仰にもとづいて生活することを黙認した<sup>64)</sup>。こうして村内には最盛期に三つのルター派教会と一つのカルヴィン派教会が存在することになった<sup>65)</sup>。これは西欧で宗教戦争の荒れ狂っていた時期であることを考えると注目し値する。もっとも政府はカトリック教会に対しては異なる態度を示した。村内のカトリック教徒は17世紀末にいたるまでは、自らの教会<sup>コステコール</sup>をもつことは許されなかった<sup>66)</sup>。モスクワはカトリック教徒がローマ教皇庁のみならず、ポーランド王国の手先としても警戒していたからである<sup>67)</sup>。

それにもかかわらず、多くの外国人にとって、モスクワの「宗教的寛容」は大変魅力的であった。とくに、1689年にソフィア政府が、ルイ14世治世下のユグノーに対しロシア国境を開放し、彼らを受け入れる旨宣言したときは、そう

---

について語るべきではあるまい。см. Цветаев, “Положение протестантов” (I), стр. 82-83.

- 63) Богоявленский, “Мещанская слобода”, стр. 74-105. さらに後述23ページを参照のこと。
- 64) かつてイヴァン雷帝は、教皇特使ポッセヴィーノがロシア国内のルター派を追放して、カトリックのみを認めるように要請したとき、「わが帝国には多くの異教徒が住んでいるが、われらは彼らの信仰を許している。ただ彼らは自己の信仰をわが国民の間に広めてはならない」と答えて、ポッセヴィーノの要請を斥けている。これはモスクワ国家の外国人居留民の信仰に対する政策の基本となった立場であるが、これを積極的寛容策とは言えない。Donnert, Rußland, SS. 271-272. をみよ；さらに Цветаев, “Положение протестантов” (I), стр. 71-72; Нечаева, “Иноземскія слободы”, стр. 36.
- 65) 教会の数については時期によってまた記述者によって異なる。см. Цветаев, “Положение протестантов” (I), стр. 80-81; его же, Протестантство и протестанты, ч. I, стр. 113-114.
- 66) Цветаев, “Положение протестантов” (I), стр. 72.
- 67) 16・17世紀ロシアにおけるカトリック教徒のおかれた状況については Пыпин, “Иноземцы”, стр. 280-294 に詳しい。

であった。これは明らかに、ヨーロッパ制覇の野望を抱くルイ14世を好ましく思わないソフィア政府のとした、政治的行動であった。実際に宣言に動かされてやってきたユグノーがいたかどうかは分らない。だが宣言のコピーはプロイセンで独仏語に翻訳の上、公刊されたので、ユグノーならずとも、その信条ゆえに苦しむ者たちのうちに、東方のキリスト教国の寛容に期待する者がいたとしても不思議ではない。このようにして、様々な宗派の者たちがロシアにやってくることとなった<sup>68)</sup>。だが過度の期待を抱いてやってきた者は、結局、失望させられることになった。たとえば、ブレスラウ出身のQ. クールマンがそうであった。彼はドイツの神秘思想家ヤーコフ・ベームの弟子で、その熱狂的な信仰のゆえに迫害を受け、ヨーロッパ各地を遍歴したが、ロンドンでモスクワのことを聞きつけ、この約束の町に変名の下に姿を現わした。だがドイツ人村の牧師も、クレムリンの正教会聖職者も彼の言動に危険なものを感じとり、彼はついに1689年、弟子のノルデルマンらとともに異端として焚刑に処された<sup>69)</sup>。結局、モスクワ政府はヨーロッパ人専門家獲得の必要性を宗教的観点に優先させ、その限りで若干の寛容さを示したにすぎなかったのである。

ドイツ人村の景観にも一言しておかねばなるまい。当然のことながら、それは最初からヨーロッパ都市の景観を見せていたわけではない。石造建築の立ち並ぶドイツ的な町の外観を伝える、有名なオランダ人ヘンリック・デ・ヴィットの銅版画（実は同国人ショーネベックのもの）は1705年頃のものである<sup>70)</sup>。反対に粗末な木造家屋のひしめく聚落を描くマイエルベルクの絵は最初期（1661～1662年頃）の姿を伝えている<sup>71)</sup>。B. B. ネチャーエヴァによれば、ドイツ人村に石造建築が建てられ始めたのは70年代に入ってからである<sup>72)</sup>。ゾンマーは、

68) Там же, стр. 272-273.

69) Нечаева, "Иноземскія слободы", стр. 30-31.

70) たとえば. Богословский, Петр. I, т. I, стр. 115 をみよ。

71) Альбом Мейерберга, Виды и бытовые картины России XVII века, Изд. А. С. Суворин, 1903, рис. 75 (стр. 37) 中村喜和氏よりコピーをいただいた。感謝したい。

72) Нечаева, "Иноземския слободы", стр. 23.

1684年の聖ミハエル教会が最初の石造建築であったと考えているが<sup>73)</sup>、いずれにせよ、最初の20～30年はほとんどが木造家屋からなる質素な小都市にすぎなかった。だがそれがロシアの町とは異なる外観を示していたことも疑いない。

Ⅱ. ツヴェターエフによれば、家屋は木造であったが、様式は西欧風で、果樹園と柵で囲まれた前庭をもち、道路も直すぐで広く、「もしゴドゥノフ期のドイツ人村が『ドイツ小都市』の如く見えたとすれば、『新外国人村』は、外観と内的構成からしてすでに『ドイツ都市』のようになっていた」と記している<sup>74)</sup>。ただし、道路は世紀末になっても舗装されておらず、降雨の際には交通が極めて困難であったことが知られている<sup>75)</sup>。

## 6

新ドイツ人村ができた頃、村とモスクワ市との間には広い空間が横たわっていた。だが17世紀末には、モスクワ市が膨張するとともに、この空間は消え、村は市に呑み込まれていった。それは独立した居住区であることを止めてしまった。それだけではない。村はこれとほぼ時を同じくして、法的にもその存在を止めてしまう。

1699年、モスクワに一種の都市自治機関であるモスクワ市庁（ブルミストル市庁）が創設された<sup>76)</sup>。モスクワ市民（ポサード民）はこれにより、地方長官の<sup>フネエワーズ</sup>司法・行政権から解放された。モスクワの外国人村も、他の諸村落と同様、市庁の管轄下に入った。ピョートル政府は外国人たちに首都内の好むところに家屋を求め、居住することを認めた。他方、ロシア人にも外国人村への居住が許された。すでにピョートル自身が村内に、いわゆるレフォルト宮殿を建て、ここでレセプションや会談を行い、舞踏会を催していたが<sup>77)</sup>、ロシア人高官たちも彼にならい、村やその周辺に競って家を建てた。かくて市の中心部からヤウ

73) Sommer, "Der junge Zar", S. 71.

74) Цветаев, Протестантство и протестанты, ч. I, стр. 257.

75) Богоявленский, "Немецкая слобода", стр. 227-228.

76) 1699年の都市改革については、さしあたり Богословский, Петр. I, т. III, ОГИЗ 1946, стр. 235-335. をみよ。

77) F. レフォルトとピョートルの関係についてはさしあたり Sommer, "Der junge

ザ川方面にむかって、ミャスニツカヤ（現キーロフ）通りや旧バスマンナヤ（現カール・マルクス）通り、新バスマンナヤ通り、ポクロフカ通りに沿って、壮大な石造建築群が立ち並ぶことになった。

ドイツ人村はこのようにしてその短い歴史に終止符をうった。以後ただその記憶だけが、一本の道路につけられた名称とともに、民衆の心に留められることになったのである。

## 7

17世紀のモスクワには他にも外国人村があった。とくに地理的理由からか、ポーランド人やリトワ人、また白ロシア人に関係する村が多かった。

まずスタロパンスカヤ村。「パン」とは主にポーランド人やリトワ人をさす言葉である。この村はヴォロンツォーヴォ原のシロミャートナヤ村とメリーチナヤ村の間、今日のチカローフスカヤ通り付近にあったX。すでに1620年にこの地区に何軒かの外国人家屋が記録されているが、1638年になるとそれは52軒に増えていた。うち1軒はドイツ人の家で、他の多くはポーランド人とリトワ人のものであったという。彼らは新ドイツ人村建設後もここに留っていたが、ロシア人と民族的に近かったことなどもあって、急速にその独自性を失っていった<sup>78)</sup>。

ザモスクヴォレーチエのヤキマンカ（現ディミートロフ）通り沿いに、もう一つのポーランド人（パンスカヤ）村があったY。ここには白ロシア人やイギリス人、オランダ人も住んでいた。住民の多くは軍人だったが、士官クラスの者は少なかったと言われている。この村もスタロパンスカヤ村同様、18世紀にはその民族的特性を失っていた<sup>79)</sup>。

Zar” SS.77f. をみよ。

78) Звягинцев, “Слободы”, стр. 85; Снегирев, Московские слободы, стр. 201  
ツヴェターエフ及びボゴヤヴレンスキーによれば、これは Иноземская слобода  
と呼ばれた。Цветаев, Протестантство и протестанты, ч. I, стр. 249; Бого-  
явленский, “Немецкая слобода”, стр. 231.

79) Звягинцев, “Слободы”, стр. 85; Снегирев, Московские слободы, стр. 202-  
20.

モスクワの北部、ゼムリャノイ・ゴロドのスレーチェンスキエ門の外側、今日メシチャンスカヤ通りのある付近にあったメシチャンスカヤ村も、ポーランド人と関係が深かった<sup>80</sup>。「メシチャニーン」は17世紀には、町人一般ではなく、ポーランド・リトワの都市民を意味した<sup>80</sup>。この村は1670～1671年に成立した。1654～1667年のポーランド・ロシア戦争終結後、ポーランド、リトワ、バルト海沿岸地方からの捕虜が多数流れ込んできたことと関係がある。ボゴヤヴレンスキーによると、1676年時点で、村には570戸、674人の住民が登録されており、1684年には、それが844戸に、1691年には878世帯(хозяйство)に増加していたという<sup>81</sup>。住民の多くはポーランド国家領内の白ロシア人であった。彼らは外務庁を介して「ツァーリの保護」や様々な特典を得、独自の選出長老と種々の下級職の下に一定の自治をも享受していたが、国庫から課される諸義務は重く、また外務庁から派遣される治安責任者たる士族の支配を強くうけていたので、その生活条件はモスクワの一般のボサード共同体に比し、そう恵まれたものとは言えなかった。また住民の多くが早くからロシア化していたこともあって、外国人村としての特性が強く発揮されることもなかった<sup>82</sup>。この村にはユダヤ人移住者の一団も住んでいたが、これはモスクワにおける最初のユダヤ人集団であった可能性がある<sup>83</sup>。

モスクワの東部、ゼムリャノイ・ゴロドの外側、ヤウザ川左岸の旧ニコロ・ヤムスカヤ（現ウリヤーノフスカヤ）通り付近に、ギリシア人村があった<sup>83</sup>。規模は分らないが、比較的小さな聚落であったと考えられる。確かにモスクワには少なからざるギリシア人がいた。とくにコンスタンティノーブル陥落（14

80) *Словарь русского языка XI-XVII вв.*, вып. 9, М. 1982, стр. 144.

81) *Богоявленский*, “Мещанская слобода”, стр. 25, 39, 127, 128. ただし. стр. 76 では1676年時点で560戸としている。またボゴヤヴレンスキーは、1930年の論文では1684年時点の戸数を692としていた。С. К. Богоявленский, “Московские слободы и сотни в XVII в.”, в: *Московский край в его прошлом*, ч. 2, М. 1930, стр. 124.

82) *Мещанская слобода* については最近出版されたボゴヤヴレンスキーの研究(注60)が極めて豊富な情報を伝えてくれる。この村については今後特別の考察が必要である。

83) *Звягинцев*, “Слободы”, стр. 85.

53年)以後モスクワにやって来たギリシア人聖職者は暖かく迎え入れられた。だがギリシア人商人の場合は別であった。彼らの活動はウクライナのプーチープリを中心とする南ロシアに制限された。それゆえモスクワにおけるギリシア人の数は過大に評価されてはならない。ギリシア人居住区は、市の中心部キタイ・ゴロドのニコリスカヤ(現10月25日)通りにもあったことが知られている<sup>84)</sup>。

ザモスクヴォレーチエの現トルマーチェフスキー横町付近にあったトルマーツカヤ村についても触れておかねばならない<sup>XIV</sup>。これは外国庁や外務庁などいくつかの官庁に所属する通訳官トルマーチの多くが住む村である<sup>85)</sup>。モスクワに通訳官のための特別の聚落が存在していたことは、この時期のモスクワが諸外国と活発な交流を行っていたことの一つの証左になりうる。コトシーヒンが伝えるところによると、外務庁だけで1660年代の初めに、50名の翻訳官ペレグォーチキと70名の通訳官トルマーチを抱えていたことが知られている<sup>86)</sup>。だがそのうちの何名が外国人であり、村に住む外国人は何人ほどいたのかは分らない<sup>87)</sup>。

## 8

16・17世紀のモスクワに様々な外国人村が存在していたという事実は、ロシアがピョートル以前に相当程度西欧文明に接していたことを示している。このことは17世紀後半のロシアに住んでいた外国人の数からも判断できる。もちろん

84) Там же, стр. 86.

85) Там же,

86) Г. Котошихин, О России в царствование Алексея Михайловича, изд. 4-ое, СПб. 1906 (Slavistic Printings and Reprintings. 126, Mouton 1969), стр. 86.

87) Богоявленский, "Московские слободы", стр. 124 によると、ゼムリヤノイ・ゴロド内のトヴェールスカヤ(現ゴーリキー)通りと小ドミトロフカ(現チェーホフ)通りの間の土塁付近にもドイツ人村があったとされているが(XV)、詳細は不明である。П. В. Сытин, Из истории Московских улиц, Изд. третье, М. 1958, стр. 417 によると、17世紀にここに外国使節の宿泊施設 Путьевой Посольский двор が存在したというが、何らかの関連があったかもしれない。

末尾の地図にはクリミア汗国からの外交使節(彼らには多数の商人が同行してきた)の宿泊施設クリミア館(XVI)とタタール人の村(不詳)(XVII)の位置も示しておいた。



ん正確な統計資料があるわけではない。だが1671年から1673年にかけてロシアを訪れたクールランド生れのヤーコブ・ロイテンフェルスは、ロシアに住む西欧人の数を全部で18000人と伝えているという<sup>88)</sup>。この数字は相当に誇張されたものと考えられるが、プラトーフが17世紀末のロシアにいるオランダ商人だけで300人以上、モスクワに住む外国商人を1000人以上、また1696年時点での外国人将軍及び士官（少尉補を含む）を954名（騎兵隊231名、歩兵隊723名）と見積っているとところからも<sup>89)</sup>、モスクワにおける外国人の存在と活動は無視しえぬものであったことは疑いない<sup>90)</sup>。

この点についてプラトーフは次のように述べている。「ロシア歴史学は、17世紀のモスクワにおける文化輸入の研究のための膨大な資料をもっている。ピョートル大帝以前のロシアの生活の『停滞性』や『化石状態』に関する古い観念は、すでにはるか以前にお蔵入りしてしまった。<sup>91)</sup>」プラトーフの半世紀以上も前のこの指摘に本稿の筆者も賛成である。

だがここで最後に触れておかなければならないことがある。本稿の如きテーマを扱う際に、モスクワ国家に対する西欧文明の影響力が逆に過大評価されやすい、という事情に関してである。たとえば東ドイツの研究者P. ホフマンは、先にあげたE. アムブルガーの著書に対する書評のなかで<sup>92)</sup>、本書で扱われた

88) V. Gittermann, *Geschichte Rußlands*. Bd. II, Frankfurt/Main 1965. S. 15 の伝えるところによる。

89) Платонов, *Москва и Запад*, стр. 129, 133.

90) Богоявленский, “Московские слободы”, стр. 127 によれば、17世紀中葉のモスクワには、約150の слобода に全部で20,000戸を少し越える слободское население が居たが、うち外国人は500戸であった。Fuhrmann, *Origins of Capitalism*, pp. 218-219 は興味深い計算をしている。1670年のロシアには2700人の将校（現役・退役を含む）、230人のマニファクチュア労働者、400人の商人（うち100人はオランダ人）、130人の職人、技術者、時計工…、150人の翻訳者、官吏、30人のマニファクチュア経営者、企業家、12人の医師、薬剤師、天文学者の計3650人の外国人が（少なめに見積って）居たという。ただし典拠は明らかでない。また Fuhrmann が一般的に数字の扱いに、雑なところのあることも気になるところではある。

91) Платонов, *Москва и Запад*, стр. 61.

92) *Jahrbuch für Geschichte der Sozialistischen Länder Europas*, Bd.15/1, 1971, SS. 233-237.

ようなテーマについて、「一見して政治的評価の彼方にあり、完全に『純粹』科学の領域に属しているように見えるが、実は、この見かけは人を欺くものである」と述べているのがこのことと関連している。ホフマンは続けて次のように述べる。「とくに17世紀及び18世紀前半にロシアにやってきた外国人専門家の意味は、過少に評価されてはならない。だが人はまたそれを、西と東の文化落差とか他のこの種の構想のなかで、過大評価すべきではない。」彼によれば、アムブルガーが「一方的で、それゆえに誤った解釈」に達しているのは、彼が西欧人の「募集」という側面にのみ注意を集中して、これらの外国人がロシアにおいて実際にどのように行動したのかにはあまり関心を示さず、またロシア史全体の流れのなかで考察することを怠っているからであるという。

ソヴェトの研究者が一彼らはそもそも本稿で扱ったようなテーマに積極的な関心を示さないのだが一このテーマにむかうとき、もっぱら、外国人村がロシア社会において決して模範的な存在ではなく、またその影響力も大きくはなかったことを示そうとしている<sup>93)</sup>のも、これとの関連で興味深い。確かに、たとえばプラトノフが、西欧の外国人がロシアに多大な影響を与えたことを指摘しながら、次のように記すのを見ると、ソヴェトの研究者が上記の如き立場に固執しようとするのも十分に理解できるのである。プラトノフは言う。「こうした外部からの影響は、二点において反駁しえないように思えた。第一に、外国人はモスクワ人以上に知識があり、能力があった。好むと好まざるとにかかわらず、彼らを教えるのではなく、彼らから学ばなければならなかった。第二に、彼らはより以上に自由で、陽気な生き方をしていた。古くさい、ビザンツ風の禁欲主義的抑圧の下に、モスクワの聖職者は生活の健康な喜びのあらゆる発現をしめ出していた…<sup>94)</sup>」

外国人一般に知識や能力があるかのような見解は、おそらくソヴェトの研究者の容認しえないところであるだけでなく、事実にも反している。本稿の筆者

93) とくに Боговлянский, “Немецкая слобода” 論文にこのような志向が強い。

94) Платонов, Москва и Запад, стр. 60.

は、一方では本稿で取りあげた如きテーマの重要性を強く感じながら（というのも、ロシアにおける外国人の存在の意味を問い、彼らに対するロシア政府と国民各層の態度をさぐることは、ロシア社会そのもののあり様を逆に照らしだしてくれるであろうからである）、他方でその研究方法と態度においては慎重でなければならないと思っている。

16・17世紀モスクワにおける外国人村

